



永遠の相における観照と至福：スピノザにおける 個物と無限なものとの関係について

著者	池田 全之
雑誌名	教育思想
巻	43
ページ	1-19
発行年	2016-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10097/64263

永遠の相における観照と至福

スピノザにおける個物と無限なものとの関係について

池田 全之（お茶の水女子大学）

はじめに

人間の完成可能性を信じ、この理想に方向づけられて人間形成論が構築されてきた近代以降の人間形成論史を顧みるとき、それは、設定される理想状態としてであれ、神話的な過去に仮託されたイメージとしてであれ、現在とは隔てられた時制に置かれたイメージと現在とをいかに媒介するのかという問題に規定されていることに気づかれる。さらに注目しなければならないのは、この問題設定においては、有限な我々がどのように理想という無限なものに関わるのかという存在論的な問題が回帰していることである。そして、ドゥルーズは『差異と反復』（1967 年）において、近世以降の哲学はこの問題に対して二つの典型的な回答を見出していると指摘している。

ドゥルーズによれば、無限と有限の関係の典型的な説明モデルはヘーゲルに見られる。ヘーゲル思想からは、自同的精神が自己内に取り込まれた矛盾を契機として漸進的に自己形成して絶対知への到達を旨とする過程を容易に想起できるだろう。ドゥルーズはこの過程を、絶対知という無限大と有限者との関係のあり方の説明として読解する。そしてこの過程を推進する動力としての「矛盾」について、精神は、矛盾を駆動因として、差異を根拠へと関係づけ直すことによって、差異の解消に向かうと言う。そのとき有限な精神は、差異の孕む矛盾を「尖端まで突き詰める」ことによってのみ、逆説的にそれを達成すると言う。

矛盾（差異）が極まるとき、精神は〈他なるもの〉によって否定され、なおかつ否定されている自分を否定されているとして定立することによって、自己への帰還を果たす。この過程を経て、差異は否定性として規定されて、内在的に生産的なものとなる。絶対知という究極的に到達されるべき自同性が現状との究極的矛盾であることを踏まえれば、絶対知の究極的自同性という差異は「神学的な無限大」として有限者に表象されることになる。

そしてこのようなヘーゲルモデルとは異なるもう一つの無限と有限の関係のモデルを、ドゥルーズはライブニッツに見出している。つまり、ライブニッツは微分法のアイデアにおいて、無限小の中に有限者を震撼させるような無限との関わりを織り込んでいる。このようなドゥルーズのライブニッツ解

釈の妥当性については別に検討されなければならないが、『差異と反復』が指摘する近世思想における無限小に無限と有限の交錯を見出す方向はスピノザ（Spinoza, Baruch de 1632-1677）にもあるように思われる。

「我々の精神は、自己と身体を永遠の相のもとに（sub aeternitatis specie）理解する限りにおいては、神の認識を必然的に有している。そして自分が神の中にあり、神によって把握されていることを知っている」（ESP30）。

この『エチカ』最終部の一節は、我々の精神という有限者は、自己と身体を「永遠の相のもとで」認識するならば、神に包まれていることを実感できると述べている。そして精神がそのもとにあるとされる神については、「神によって私が理解するのは、絶対的に無限な存在、つまり、その各々が永遠で無限な本質を表現している無限な属性からなる恒常的な実体である」（E1Def5）と述べられていることから分かるように、無限なものである。すると、先に引用した第五部定理 30 は、個物（精神）の構成要素という最小単位がそのものにおいて無限に通じていることを意味している。しかも本論での議論を先取りして言えば、スピノザにおいては、有限と無限の関係を担うのは「直観知（scientia intuitiva）」であり、ヘーゲルの場合とは異なり、そこには矛盾や否定を介した発達が含まれていない。

通常の人間形成論モデルにおいては、ヘーゲルの提唱した「無限大」モデルこそが生産的であると考えられているが¹、こうした見方からすれば、個物がそのものにおいて葛藤も生成もせず無限に通じるという近世思想の取る方向性は、何かアクチュアリティを有しうるのだろうか。本稿は、この大きな問題を念頭に置きながら、スピノザの認識論の行方を見定めることを目指す。

神のうちにあるものとしての有限者

本稿の目標は、精神の認識様態の解明であるが、『エチカ』は、現存する精神からは議論を始めていない。精神は、さしあたりは「個物」一般として捉えられ議論されている。したがって、我々もまたスピノザの議論の道筋に密着しながら、現存する精神の構造分析にまで迫っていきたいと思う。まずは、『エチカ』の提示する万象の存在論的構造から見ていこう。周知のように、スピノザ思想の基本原理は神である。もちろん神と言っても、そこには意志

¹ 例えば、L・ヴィガー／山名淳他編著『人間形成と承認 教育哲学の新たな展開』、北大路出版、2014年参照

も目的性も自由も見出されず、ひたすら自己の必然的法則性に従って生起する何かとみなされている（『エチカ』第四部の序論では、「神、あるいは自然（*deus seu natura*）」と神は呼ばれている。つまり、ここで言う「自然」は、第一部定理 32 備考によれば「能産的自然（*natura naturans*）」であり、古代ギリシア語の自然の語源であるピュエスタイ、つまり自己によってのみ存在し「（目的や意志を欠いて）自ずから生起する」から来たものである）。そして、「個物」は「様態（*modum*）」と総括的に命名されている。

『エチカ』によれば、神とは「無限の属性からなる恒常的な実体」（E1P11）であり、実体とは、「それ自体においてあり、それ自体によって概念され、その概念が他のものの概念を必要としない」（E1Def3）独立して自存する究極原理である。そしてこの唯一の実体は、その表現型として無数の「属性（*attributum*）」を有するとされており、この属性は、永遠性と無限性²を本性とする実体のそのままの表現であるから、実体と同じ性質を有するとみなされる。このように道具立てしたうえでスピノザは、「一切は神のうちにある」ことを次のように証明する。神とは、自身である実体の本質を表現しているすべての属性がそこへと帰される絶対的に無限な存在である。すると、神以外の実体があるとすれば、その存在は神の表現型としての属性によって説明されるはずである。もしそうであるならば、実体には本来一つの属性が備わるはずであるが（同じ属性を持つ二つの実体があるとすれば、この二つの実体は区別できなくなる）、そうなれば、神以外の実体と目されるものは、自身を表現し他から区別される属性と、究極実体である神が自分以外の実体と目されるものを表現する属性という二つの属性を持つことになる。だがそうなれば、この実体はすべての属性を孕む神＝実体と区別できなくなる。それゆえ、「個物（*res particulares*）」は、神の諸属性の変状（*affectio*）、あるいは、それによって神の諸属性が確実かつ決定的な仕方では表現される様態以外のもの

² スピノザにおける無限の定義は、書簡番号 12 番のマイエル宛書簡によれば、①自分の本性によってあるいは、自分の定義の力によって無限であるもの ②何ら限界を持たないが、自己の本質によってではなく自己の原因によってそうであるもの ③その最大値と最小値を我々が分かっている、その部分がいかなる数とも等しくなく数によっては説明できないものの 3 つがある（cf. EP12, IV.52）。ドゥルーズによれば、①は実体と属性における無限の意味であり、それが必然的存在を含むものの特質を形づくる。②は属性における無限の意味であり、様態においては直接無限様態における無限の意味である。③は、個々の有限様態の構成関係を指示する間接無限様態における無限の意味である（cf. Gilles Deleuze, *Spinoza Philosophie pratique*, pp.107-108, Éditions de Minuit, 2011, Paris.）。

ではない」(E1P25C)。

スピノザによれば、諸属性を介しての神の表現が、個物＝様態であるということになり、神は自己に対する他者として様態を創造するのではなく、神が属性を介して様態に形を変えて現れているものが有限者であることになる。

すると神は自由に属性を創造し、この恣意的に創造された属性を介して様態は現象することになるのだろうか。神による自由な世界創造の可能性につながるこの問いについて、まずスピノザは、「神の本性の必然性から無限に多くのものが無限に多くの仕方で生じる」(E1P16)と言う。すなわち、スピノザによれば、神は自分の無限本質を表現する絶対的に無限な数の属性を有するはずであるから、それらの属性に従って様態に変状して生起する。しかもこの生起は、定理 17 によれば、外部から強制されてではなく、自己の本性の法則に従ってのみ生起する。そうであるなら、『エチカ』の冒頭で定義として「自己の本性の必然性によってのみ存在し、自己によってのみ作用することへと決定されるものが自由であると言われる」(E1Def7)と言われていることを踏まえれば、神は自由であることになる。それでは神は恣意的に属性を創造することも創造しないこともできるのか。定理 17 備考では、無限であり絶対的に完全であるはずの神が、現存するものとは別様な様態を、言いかえれば、様態の生起の間接原因である属性が現状と別様であることを考えることは、三角形の本性からその三つの角の総和が二直角に等しいことにならないと考えることと同じくらいに不条理である。というのも、そのように考える者は、全能である神が、無限に多くの創造可能なものを認識しながら、それを決して創造しえないでいると認めており、その結果、神は一切を創造してしまえば、自己の全能を使い果たして不完全になると主張しているからである。そしてその結果、神は自己の能力が及びうるすべてをなすことができないことになり、神が完全でなくなってしまう。ゆえに、「神は一切のものの内在的原因であって超越的原因ではない。……存在するものはすべて、神のうちにあり、神によって把握されねばならない」(E1P18)。

同様の事態を今度は、有限者、すなわち第一部の設定では個物の側から考えてみたい。個物とは属性を介しての神実体の変状であり、神を一定の仕方では表現する様態である。するとこのことから当然の帰結として、「何かを働くように決定されているものは、神によって必然的にそうするように決定されている」(E1P26)、「ものは、それらが生み出されたのと別な仕方や別の秩序によっては、決して神によって生み出されえなかった」(E1P33)ということになる。スピノザは神から必然性に仕がって生起する様態について、さらに詳しく次のように説明している。「必然的かつ無限に神によって存在すると

いう様態化を通して様態化される限りでは、何であれ神のある属性から帰結するものは、同様に必然的かつ無限に存在しなければならない」(EIP22)。

スピノザによれば、絶対的に無限であるべき神の表現型である属性から生起するものも本性上は無限であるべきである。ここでスピノザは個物の典型として思考を取り上げる。思考とは、スピノザの存在論によれば無限な思考属性を介しての神の表現であり、無限である。また属性は各個独立しており、相互に還元不可能なのであるから、思考様態に限定を加えるものがあるとするれば、それは思考そのものだけのはずである。このことを踏まえて神が神の観念を有するという反省モデルで実体と様態の関係を考えてみる。するとそこでは、神が神の観念へと思考により自己限定していることになり、この限定は、さしあたり神の観念を構成しないいっそう包括的な思考によってなされると考えられざるを得ない。すると神の観念を有する限定された思考と神の観念よりも包括的な思考が存在することになる。そうであれば、神の観念は遍在せず絶対的に必然的ではないことになる。このような推論を生むことを避けるためには、神が自己を様態化して生起する限りは、反省構造を取らずに、絶対的な必然性に従ってそのまま属性ひいては様態が生起すると思えるしかない。それゆえ、思考様態からすれば、ある観念が発生する以上、その観念の根拠は無限でなければならず、スピノザの場合には、〈諸属性を介しての唯一の神の生起の多様な表現〉という存在論的構造が採用されているのであるから、思考属性に当てはまる事柄は、すべて他の属性にも該当することになる。

すると様態は、本性上は絶対的に無限であることになる。だが、個物である我々は、一定の持続を有する死すべき運命にあるものである。この厳然たる事実とスピノザの説明はどのように関わるのだろうか。スピノザが考える様態というのは、我々が眼前にする個物とは異なるものなのだろうか。様態の存在構造については『エチカ』ではこれ以上に語られてはいないので、多くの研究書がその理解のために、書簡番号 32 番のオルデンプルク宛書簡と同 64 番のシューラー宛書簡を参照している。

「全体と部分に関しては、私は、ものの本性が互いに適合しあい可能な限り相互に一致する限りで、そのものをある全体の部分として考えます。……たとえば、リンパや乳糜の諸粒子の運動が、大きさや形の状態に従って、互いに適合しあっていて、著しく互いに一致しあい、各々の流動体が同時に一切を構成するとすれば、その限りにおいて、乳糜やリンパは血液の一部と考えられます。……今や私たちは、小虫が血液の中で生きているものと想像します。そしてこの小虫は、血液やリンパの粒子を見分ける力を持ち、理性によって、どのように各々の粒子が他のものの衝突によって跳ね返ったり、運動の一部を自身に伝

えたりするのかを観察する力を持つとします。この小虫はこの血液の中で、ちょうど我々がこの宇宙の部分の中でそうであるように、生きています。……私たちが、血液に新しい運動を伝達するいかなる原因も血液の外部には存在しないとか、その中へ血液の諸粒子がその運動を伝達できるいかなる空間もいかなる他の物体も血液の外には存在しないと想像するならば、血液がその状態に常に留まり続けて、血液の諸粒子が、リンパや乳糜へ向かう血液の運動の所与の状態から理解されうる以外の変化も被らないだろうということは確実です。そしてこうして、血液は常に、部分としてではなく、全体として考えられなければならないのです。……自然の一切の物体が、私たちがここで血液を理解したのと同じ仕方でも……理解されなければなりません」(EP32, IV.170ff.)。

この一節にある血液全体を、無限の神が変状して表出されている宇宙（ものの総体）と、リンパや乳糜を宇宙に含まれる個物と置き換えてみよう。すると、それらの個物（リンパや乳糜）は宇宙（血液）の法則に従って調和し続け、一定の血液の状態や性質を帯び続けていることになる。つまり、スピノザにおいては、延長属性を介しての神の表出である宇宙は、一定の規則に従って、その中にある一切を決定されており、全体として調和しているということになる。『エチカ』第二部によれば、延長様態一般の規則性は「運動」と「静止」の割合である。cf.E2P13L1）。スピノザは無限な神に直接に由来し、その中に含まれる一切の個物の関係を規定する規則を「直接無限様態」と呼ぶ。しかし、個物の立場からすれば、それが宇宙全体の性質を表現するまでには多くの出来事があるだろうし、個物は消滅したり新しく生じたりするかもしれない。しかし、全体として見れば、宇宙は、個物の無数の変化のただ中でも常に一定の「全宇宙の姿（*facies totius universi*）」を示している。スピノザは、神からみて間接的に属性に由来し、流転しつつ一定であり続ける宇宙の姿を「間接無限様態」と呼ぶ³。

スピノザの書簡は、延長属性を例にとりて説明しているが、スピノザにおいては、神の生起はあらゆる属性において同じ秩序に従い連鎖するものと考えられていた。すると、思考属性の立場からこのことを整理すると、神にお

³ 桂寿一によれば、スピノザが無限様態を二つに分類したことの理由は、スピノザが神の観念とそこから無限に多くの仕方に出てくる一切の観念を分け、前者を神の本質と属性の観念であり能産的自然の観念として直接無限様態に分類し、後者を、神の属性から出てくるものであり所産的自然の観念として間接無限様態にあたると解釈していることを見る（同『スピノザの哲学』、182頁、東京大学出版会、2009年）。なお、ドゥルーズは、思惟属性における間接無限様態を、「存在する様態の観念として個々の観念を限定することを規則づける観念的な構成関係」（Deleuze, *ibid.*, p.115）と特徴づけている。

いては宇宙を現にある宇宙たらしめる法則性の観念（「運動」と「静止」の割合の観念）である直接無限様態があり、宇宙を構成する各個物の観念とそれらによって構成される宇宙全体の観念である間接無限様態があるはずである。この二つの無限様態は、直接無限様態に規定されて、現存する様態の観念としての個々の諸観念がその下で決定されて一定の構成関係に入ることの結果、表出される包括的観念（宇宙の相の観念）が存在するという関係にあり、神の思考属性である「無限知性」は、それら一切を包摂していることになる。

したがって、万象の存在と本質の根拠が神にあるということが意味するのは、現存する一切のものの観念が、一定の法則性に従って神の無限知性に内包され整序されているということである。しかし、上述した血液の例でも述べられていたように、たしかに全体としては血液の状態という不変の調和を表現してはいても、その構成要素である個物は、他の個物に取り囲まれそこからの作用を受け続けているはずである。すると、個物の生成消滅とは無関係に全体が一定であり続けるのだから、個物の個物性が無に帰せられることにはならないのか。個物には、それが存在するからには、何らかの意味や位置価値は存在しないのだろうか。『エチカ』の第一部では、個物は様態という総称の下に分析されるに留まっており、いっそう具体的に、人間にとって知解可能な二つの属性である精神と身体として個物のあり様が分析されるのは、その第二部においてである。

身体の刺激状態の観念としての精神

上述のように、様態とは神の属性を介しての変状である。このように確認したうえで、スピノザは、神の無数の属性のうち、人間が知覚できるのは「思考」属性と「延長」属性だけであるとする。また、スピノザの世界観によれば、この二つの属性の関係は、唯一の神が、延長属性を経由する場合にはものとして表現され、思考属性を介する場合には神の変状であるこのものの観念として表現されることになる⁴。ところで、この観念の秩序とものの秩序の

⁴ シャンタル・ジャケは、スピノザの「心身並行論」について、身体で生起することが同一秩序で精神にそのまま起こることを意味していると考えたことの誤りを指摘している。そしてそのために、ジャケは、隣人の鶏が自分の家に飛び込んだことに驚いた人が思わず、「自分の家が鶏に飛び込んだ」と叫んでしまった出来事を検討する E2P49S を指示している。ジャケによれば、この事実を上記の並行論理解は説明できない。この人には「自宅に飛び込む鶏」の観念があるはずである。しかし、身体はこの観念を逆転させて表現している。それゆえジャケは、スピノザにおける「心

並行性をスピノザが認めるのは、さしあたり神においてである。つまり神が自身をもに変状させる「力能 (potestas)」がそのまま神の無限知性においては、この変状についての観念として現れているということである。ものが現存するからには、それと同時に思考属性を経由して、この現存するものの観念が神の中で表現されていることになる。

スピノザにおいては、神の必然性によって属性を経由して表出されるものは、すべてそのまま真である。もしそうであれば、人間もまた様態として神の変状なのであるから、延長属性と思考属性のもとでの神の同時的表現であるはずである。「人間の本質には実体の存在は帰属しない。あるいは、実体が人間の形相を構成することはない。……このことから帰結するのは、人間の本質は神の属性のある様態への変状 (modificatio) から構成されるということである」(E2P10)。だから、人間精神は、思考属性を介して表現される神の無限知性に内包される神の思考属性の変状であることになる。以上のことを、第一部の議論と重ねあわせるならば、思考属性を介しての神の表現はすべて、延長属性を介して神の表現と同じ秩序に従っているのだから、人間精神が抱く観念は、延長属性を介しての神の表現である人間身体においても並行的に存在していることになる。

「何であれ、人間精神を構成する観念の対象において起こるものは、人間精神によって知覚されなければならない。あるいは必然的にそのものの観念が精神の中に存在しなければならない。つまり、もし人間精神を構成する観念の対象が身体であるならば、精神によって知覚されないものは何もこの身体において生起することができないだろう」(E2P12)。

唯一の実体の二種類の表出された様態として精神と身体を認めるとすれば、身体において生起する事柄はすべて、神を介在させて、人間精神にその観念があることになる。第二部の公理として、スピノザは我々の身体が多様に刺激されることを厳然とした事実であると認めているが、このことを踏まえて、第二部定理 12 の内容は、「人間精神を構成する観念の対象は身体である。あるいは、顕在的に存在するある延長様態である」(E2P13) と言い換えられる。身体が刺激されているという事態を考えてみる。身体は神の延長属性を介し

身並行論」とは、「人間精神を形成する観念において到来するものがすべて、人間精神によって知覚されるべきである」(E2P12) との意味で厳密に理解されるべきであると述べている (cf. Chantal Jaquet, *L'unité du corps et de l'esprit Affects, actions et passions chez Spinoza*, pp.11-15, PUF, 2004, Paris)。

た表現なのであるが、身体が刺激されていることの観念もまた神の思考の中にあるはずである。だが、かりに身体が人間精神の対象でないとすれば、刺激される身体はの観念が、同じ神の思考属性を介した表現である我々の精神の中になくなってしまい、人間精神以外のものにおける神の思考属性を介した表現として様態化されることになる。だが、我々の精神は、事実として、常に多くの刺激についての観念を有している。ゆえに人間精神を構成する対象は現実存在している身体以外のものとは考えられない。「それゆえ、人間は精神と身体からなる。人間の身体は、我々がそれを感じるままに存在する」(E2P13C)。

さて、人間という〈場所〉において、神の思考属性を介しての表現と延長属性を介しての表現が並行しながら一致しているとすれば、上野修が指摘するように⁵、有限で小さな人間精神が世界や自己を認識するのではなく、万象の実相は、神の無限の思考と延長属性を介しての神の表現である現実世界とが継起的に生起しているというのみである。人間が自ら思考していると思ひ込んでいるのは、実はこの巨大な思考の連鎖の、ある条件下での現れにすぎないということになる。

そして、人間精神とは、身体の状態の観念であるということ、スピノザは第二部定理 15 と 16 で詳述している。「人間精神の形相的存在を構成する観念は、単純ではなく、多くの観念から構成されている」(E2P15)。精神が有する観念は身体はの観念であり、この身体はの観念には、その原因である同じ神の延長属性を介しての表現である対象(身体)が並行的に存在する。それゆえ、精神が抱く身体はの観念が複雑であれば、それだけ現象する身体は「きわめて複雑な組織のきわめて多くの個物から組織されている」。さらに、定理 16 は、身体が外的物体によって刺激されていることの観念は、同じ神の思考属性を介しての表現である身体はの観念とそれを刺激する物体はの観念をも含むことになる、と述べる。このように、同じ神からなる外的物体はの観念と身体はの観念の合成や連鎖が継起的に惹起することが、我々の知覚の実相である。

以上の身体と精神の関係についての議論を、スピノザにおける無限と有限との交錯を検討するという問題設定との関係で、神の無限知性と人間精神との関係の見地から、再考しよう。スピノザは『エチカ』第二部定理 19 と 20 で、人間精神は、人間身体が受ける刺激の観念を介して身体を認識すると述

⁵ 上野修『スピノザの世界 神あるいは自然』, 118 頁, 講談社, 2005 年

べている。この事態を延長属性の側からみれば、身体は、他の多くの物体（延長属性を介しての神の多くの変状）から構成されている。すると、人間精神の抱く身体に関する観念は、それを構成する多くの他の物体の観念から構成されているはずである。このように考えれば、精神は身体の刺激状態の観念であるから、自身の原因としての身体が存在と並行する観念を神の無限知性の中に持つはずである。したがって身体の観念の所在を介して、「人間精神の観念ないしは認識も神の中にある。この認識は、神において、人間身体の観念ないしは認識がそうであるのと同じ仕方で神の中で生じ、神に関係づけられる」（E2P20）。身体を構成する諸個物、それらから構成される物体としての身体、そしてそれらに並行的に存在する身体の観念が神の中に存在する。そして身体は、そこにおいて身体を構成する諸個物が一定の秩序で構成されている物体であるから、身体の観念とは、諸個物の観念からの構成体ということになる。さらに、人間精神は身体の刺激状態の観念であるから、身体を刺激する物体の観念も、刺激に関わる限りで一定程度、精神の構成に関わってくる。このように「人間精神」という〈場所〉において、諸個物の観念が複雑に構成される。このような複雑な観念の構成体である精神の観念そのものもまた、それを構成する個物の観念とともに無限知性の中に含まれている。そして、スピノザは、刺激を受けている自分を意識するメタな意識のあり方を「観念の観念（idea ideae）」と命名し、それもまた無限知性に含まれるとする⁶。

「人間精神は身体の刺激状態ばかりか、これらの刺激状態の観念をも知解する。……刺激状態の観念の観念は、刺激状態の観念と同じ仕方で生じ、神に関係づけられる。しかし、身体の刺激状態の観念は人間精神の中にある。つまり、人間精神の本質を神が構成する限りにおいては、神の中にある。ゆえにそれらの観念の観念は、神が人間精神の認識ないしは観念を有する限りにおいて、神の中にある」（E2P22）。

だが、一切が神の中にあると考える場合には、問題が残らないだろうか。

⁶ ミヒヤエル・シュリジベルスは、「刺激状態の観念」を「情報を蓄積する前意識的なメカニズム」として理解すべきとしたうえで、意識の確固たる実体性を認めない「身体刺激状態の観念」としての精神理解の特異性を、「精神は身体の観念なのだから、精神が観念を持つのではない。そうではなくて、身体印象が発生し、つまり『情報を蓄積するメカニズム』が察知されるときに、精神は初めて情報を自由に扱うことができるがゆえに、精神は観念を持つのである」（Michael Schrijvers, *Spinozas Affektenlehre*, S.53, Haupt Verlag, 1989, Bern u.Stuttgart）と述べている。

スピノザによれば、一切が神の必然性に従って生起するのであれば、なぜ人は虚偽を犯すのだろうか。この問題は、『エチカ』第一部と第二部前半で記述された様態一般の存在論的構造を、いかに人間精神が知解できるのかという問題に直結するのである。

十全な認識と至福の在り処

(1) 非十全な認識としての想像知

ここまで『エチカ』の議論を検討してくれば、神は自身の必然性によって正誤や善悪の彼岸でひたすら生起するものなのであるから、虚偽の原因は、人間の認識様態の側にあると予想できる⁷。スピノザは、虚偽の原因を、記憶のメカニズムを説明しながら解明する。

「ここで、誤謬とは何かを示すことに着手するために、私が知ってほしいのは、精神の表象 (imaginatio) は、それ自体で見られるとすれば、いかなる誤謬も含んでおらず、あるいは、精神は、自分が想像するものゆえに誤るのではない。そうではなくて、ただ、自分に現前するものとして精神が想像するものの存在を排除する観念を欠いているとみなされる限りで誤りを犯す、ということである」(E2P17S)。

精神が身体の刺激状態を介して観念(表象)を得ること自体が虚偽を犯す原因なのではなく、ないものがあるものとして判断してしまうことにその原因がある。そのようになることの原因を、スピノザは第二部定理 18 において記憶の混乱を例にとりながら解明する。人間身体が過去に多くの物体から同時に刺激を受け、精神がこの複数の刺激に起因する表象を抱くようになると、たとえ、その複数の物体による身体への刺激そのものに関連性はないとして

⁷ 虚偽の理由を想像力による非十全な認識にみるという見地から、既に初期段階でデカルトは批判されている。すなわちデカルトは、欺く神を想定して、思惟する私の存在の確実さとそれを支える誠実な神の存在に到達するが、『デカルトの哲学原理』(1663 年)では、そのような迂路は不要だと述べられている。明晰判明な観念を有していさえすれば、観念に対応する存在物の真理性を疑う必要はないというのである。「神の明晰判明な観念を持つ以前には、我々はいかなるものについても確実でありえない。そして我々が、はたして我々の本性の作り手が我々を欺くのかを知らない限りは、我々は神の明晰判明な観念を持ちえない。したがって、我々は、我々の本性の作り手が我々を欺くのかを知らない限りは、いかなるものについても確実でありえない。このことに私は、大前提に同意し小前提を否定することで応える。というのも、我々は、たとえ我々の本性の作り手が我々を欺くのかを知らなくとも、三角形の明晰判明な観念を有するからである。」(I.148 sq.)。

も、ある身体の刺激に起因する表象と、もう一つの刺激に起因する表象を連結して想起するようになる。この場合には、人間精神は習慣と想像力により、原因から結果へという理由の説明としての観念連合（それはスピノザによれば、当然、事物の因果性と並行的に一致している。また、それこそが、究極的な起生原因（*causa efficiens*）としての神から帰結するものとその観念の正しい秩序であるはずである。そしてこうした観念連合を理解することを、スピノザは「十全な認識（*adaequata cognitio*）」と呼ぶ。そして、想像力が生み出す観念連合を理解することを「非十全な認識（*inadaequata cognitio*）」と呼ぶ）とは別の観念間の連合を捏造する人間の想像力による観念連合の創作（こうした認識を、スピノザは「第一種認識」と呼ぶ）にこそ虚偽を犯す理由があるというのである。

このような実例を示したうえで、スピノザはこの事態は、想像力を断罪するだけでは済まないということを示そうとする。スピノザは、延長属性を介しての神の表現である人間身体が刺激を受けることが、人間精神の抱く観念を構成する原因であり、刺激を受ける人間身体は、刺激する他の事物の本性も含まれていると考えられていた。それゆえ、人間精神は、いわば、前意識的に身体はの観念とその観念に含まれる限りでの事物の観念を有している。ただし、精神が身体そのものの観念を有するののかと言えば、精神は、あくまでも刺激を受ける限りでの身体はの観念を有するのみである（cf.E2P27D）。また、外的事物についても、それはあくまでも身体を刺激する限りで、精神はそれの観念を有するだけである。さらに、刺激状態に起因する身体はの観念と刺激の原因としてこの身体はの観念に含まれる外的事物の観念を精神が自覚することによって得られる「観念の観念」においては、身体はの刺激状態を介してのみ発生する観念から構成される精神が抱く一切の観念の起源は、直接に起生原因としての神にまで辿られるわけではない。それゆえ、スピノザは、通常、身体はの刺激状態を介して得られる観念から構成される精神を生きるしかない我々は、存在根拠との関係では、「いわば前提のない結論のようなもの」を与えられるにすぎないのである。

（２）十全な認識——共通概念による認識と直観知

スピノザの思想においては、身体もその刺激状態の観念としての精神も、それらの観念は神の無限知性の中に含まれている。すると、本来的には、個物の観念は、それについての神の無限知性の中にある観念を原因として現存しているはずである。しかし、スピノザは、身体に囚われた精神の認識は、観念が生起する因果関係を正しく辿ることができないと考えている。

「存在し、働くことに關して、我々の身体は、ある決定された状態で、他のものによって存在し働くように決定され、この後者の原因もまた他の原因によってそのように決定され、このことが無限に続くというふうに原因によって決定されている。したがって、我々の身体を持続は、自然の共通の秩序とものの組織（*constitutio*）に依存している。そして、いかなる状態によってもものが構成されているのかの十全な認識は、人間身体の觀念を神が持つ限りにおいてではなく、これらのもの一切の觀念を神が持つ限りにおいて、神の中にある。それゆえ、我々の身体を持続の認識は、人間精神の本性を神が構成すると考えられる限りにおいては……我々の精神において極めて非十全である」（E2P30D）。

先に述べたように、身体は極めて多くの個物から構成されており、しかも、その觀念に關しては、身体を刺激する個物の觀念を含むのであるから、身体の觀念を起生原因から結果にいたるまで整然と説明できるためには、身体という〈場所〉に関わる一切の個物の觀念の神からの来歴を把握しきらなければならない。つまり、身体に関わる無限知性の中にある觀念すべての連鎖・構成關係が把握できなければ、精神は自身の原因である身体、ひいては他の個物總体の十全な觀念を得られないことになる。当然であるが、このようなことは有限な知性にとっては不可能であろう。こうした我々の自然的な認識の臨界に面して、スピノザは「理性」の立場への飛躍を標榜する。

スピノザの説明によれば、「理性」の立場はさしあたり、あらゆるものの共通な特性を見出す立場である（スピノザはこの認識を「第二種認識」と呼んでいる）。そして、このあらゆるものに共通な特性、つまり、「共通概念（*notio communis*）」こそが、原因からの結果の生起の必然性を指示する十全な觀念であると言う。スピノザによれば、我々は「人間」や「馬」や「犬」などのものについての一般的な概念を持つ。例えば、すべての個物「人間」に共通な特性を我々が認識する場合について、スピノザは『エチカ』第二部定理 40 備考 1 において、人間の認識能力の容量を超えない程度に個物としての人間の像を思い描くときに、個物間の些細な差異ではなく、身体がそれらの個物「人間」から刺激される限りで生じる一致点のみを表象できるときに、理性はこの一致点を「人間」と命名すると述べている⁸。そしてこの事態を神との關係で見るならば、この「人間」の共通概念 A は、すべての人間身体の觀念に共通している特性であるから、あらゆる身体の原因としての延長属性そのもの

⁸ ドゥルーズは、第二種認識をものの構成關係の合一を示すものであり、自然の構成上的一致点を示す物理・化学・生物学的な性質を有すると述べている（cf. Deleuze, *ibid.*, pp.150sq.）。

に備わっているはずである。さらに、スピノザによれば、ある人間の身体が他者の身体に刺激されて、実際にこの観念が形成されるのであるから、A は刺激される身体とそれを刺激するものに共通して含まれるとして、やはり間接的に神の属性の中に根拠を有する。それゆえ、属性は神の本質を表現するのであるから、「この観念 [A] が必然的に神において十全であるのは、神が人間精神を構成する限りにおいてであり、あるいは、神が人間精神の中にある観念を有する限りにおいてである。だから、自己を知解する限りにおいても、自分の身体ならびに任意の外的物体を知解する限りにおいても、精神は A を必然的に十全と知解する」(E2P38D)。

このように、共通概念は個物の観念の起生原因である神の存在を指示することになり、それゆえ、身体が他の物体の共通のものをより多く有するのに応じて、その身体の精神は多くのものの神との因果的に必然的なつながりを知解することになる。

しかし、理性知としての第二種認識では、ものの間の共通特性が得られるだけであって、〈今ここ〉に現存する「個物 (res singulares)」と神との関係にまでは認識が及んではない。さらに、『エチカ』解釈の難問として、スピノザによれば、精神は身体の刺激状態の観念なのであるから、身体が消滅すれば、同時に観念、あるいは精神そのものもなくなってしまうのではないかという問題もある。精神の身体との同時消滅という事態に対して、『エチカ』は次のように述べている。

「人間精神は身体とともに絶対的に破壊されることはできない。そうではなくて、永遠である精神のあるものが残る」(E5P23)。

身体が消滅した後でも残る精神の永遠な部分とは何か。上で引用した定理に付された備考からは、それは身体を「永遠の相のもとに (sub specie aeternitatis)」把握する結果であることは理解できる。スピノザはこの認識を「第三種認識」と呼んでいるが、他の二種類の認識とそれとの差異を理解させるために、次のような例を挙げている。

「たとえば、三つの数があり、二番目の数と最初の数の関係と同じく三番目の数に関わる四番目の数を得ようとするでしょう。商人たちは疑うことなく、二番目のものを三番目のものに乘じ、[こうして] 生み出された数を最初の数で割る。というのも明らかに、彼らが教師から何の証明もされずに聴いたことをまだ忘却していなかったからか、あるいは、それをしばしば非常に単純な数において経験していたからか、あるいは『ユークリッド幾何学原論』第七巻定理 19 証明の力で、特に、比例関係の共通特性から [未知数を発見したからである]。しかし、非常に単純な数においては、そのようにする必要はない。た

たとえば、1、2、3があるとすれば、誰でも四番目の比例数が6であることを知る。しかしこのことは、ただ一つの直観で、最初の数が二番目の数に対して持っている関係そのものから我々が四番目の数を結論づけるからである」(E5P40S2)。

比例数の含む未知数を、記憶を頼りにして発見するとか、しばしばなされた経験内容から発見するとは、繰り返し身体の刺激状態を介して獲得された諸観念を連合させ習慣を形成して、未知数を発見するということであり、第一種認識の説明である。比例関係の共通特性を発見して未知数を類推するというのは、第二種認識の説明である⁹。これに対して、第三種認識については、個別の数の関係に共通特性を見出す理性による比較を欠いて、一挙に個別の数関係の本質に到達する所作である。『エチカ』第二部でのこのような概括的説明を経て、第五部でスピノザは、具体的な個別的身体に関する第三種認識を、「何であれ精神が永遠の相のもとで理解するものを、精神が身体という現前するアクチュアルな存在から把握することによって理解するのではなく、永遠の相のもとで身体の本質を精神が把握することによって理解する」(E5P29)ことと述べている。そして身体の現実的存在を把握しようとする認識を、時間に決定された持続のもとでそれを理解することであると述べる。これに対して、「永遠の相のもとで」認識するとは、理性に帰属するのであり、それは、「ものを神の中に含まれて、神の本性の必然性から発生するもの」と捉えることである。

スピノザによれば、個物としての身体が、そしてその身体の刺激状態の観念が精神であるから、精神が、『エチカ』全体で論証されてきた理法に従って、神のうちから生じてきたことの必然を知解することこそが、第三種認識の境地である。そして、こうした自己と存在根拠との絆を知的に理解することこそが至福であり、それこそが「神への知性的愛 (amor intellectualis erga Deum)」であるとされている。

個物に潜む無限から帰趨するもの

スピノザにおいては、様態、すなわち個物の観念はすべて神のうちに部分として含まれている。この意味では、「ものそのものが、その様態である属性

⁹ 『知性改造論』は第二種認識を非十全な認識に割り当てている。河井徳治はその理由を、経験的知識から、この経験的知識を可能にする根拠としての理性知としての共通概念の発見・形成史から読み解いている(同『スピノザ哲学論攷』, 129-144 頁, 創文社, 1994 年参照)。

の下で神が考えられる限りで、神を原因として有するのであるから、必然的にものの観念も、それらの観念の帰属する属性の概念を、つまり、神の永遠で無限な本質を内包しなければならない」(E2P45D)。スピノザによれば、一切は神の必然的な法則性に従って現にあるがままに存在する。したがって、このことを精神との関係で考えてみるならば、精神は、刺激される身体物体とこの身体物体を刺激する他の個物の構成関係と、その構成関係そのものの観念からなる。そしてそのいずれもが神に含まれ、その無限知性の中で、それらの観念は特定の構成関係を保持している。だから、精神という個物は、時間的持続とは異なる神による無限性と必然性(つまり永遠性)によって細部まで浸透されている。

スピノザはこの無限・永遠性に浸透された個物を、その起生原因との関係で把握する能力を理性に割り振り、理性による直観知こそが我々に至福をもたらすと言う。しかも、我々の自然状態に起因する第一種認識と理性による認識の間には飛躍があるが、個物を共通概念によって把握する第二種認識は第三種認識を準備すると言っている。実は、このことの理由については、『エチカ』では第五部定理 28 でごく簡潔に説明されているだけで不分明である。そこで、ドゥルーズの解釈を参照しながら述べるならば¹⁰、第二種認識がもたらす個物間の共通性は、個物の観念にも存在するし、(我々がこの共通性を知覚するのだから)その個物という類に帰属する特定のある個物による我々の身体の刺激から帰結する観念にも存在していることから、その根拠は神の無限知性にある。それゆえ、共通概念が存在することは、それらの根拠として神の観念を内包して指示し続けている。ドゥルーズによれば、こうした神の観念を指示する構造がもとになって、個物の本質が神内に存在することの認識へと促される。共通概念の存在は、それらの個物の類が現にあるがままに存在することの必然性の根拠を指示する。そしてそこから、この類の一部としての特定の個物も等しく神の必然性によってあるがままに存在しているということへの気づきが生まれる。

このようにスピノザの思想を辿ってくると、身体の消滅後も存続する「精

¹⁰ cf. Deleuze, *ibid.*, pp.121sq. また、第二種認識と第三種認識の関係については、cf. Pierre Macherey, *Introduction à l'Ethique de Spinoza la quatrième partie*, pp. 14 sq., PUF, 1994, Paris. なおドゥルーズは、第一種認識と第二種認識の密接な関係についても言及している。つまり、身体の刺激状態によって発生する想像知によって生み出される像が存在しなければ、それらの間の共通特性を理性は発見できないというのである。

神における永遠なもの」と描写されるものの内実を理解できる。もちろん、「永遠」と言っても、スピノザ自身が再三注意しているように、時間における無際限の持続や、誕生前や死後の生（そうしたものについては、『エチカ』第五部定理 21 備考において、「精神は、身体が存続することによって以外では、何も想像する……ことができない」と述べている）が想定されているのではない。それは、〈今・ここ〉に存在しているものの神における生起の必然性こそが、永遠であるということである。つまり、上野修が正当にも指摘するように、我々は『エチカ』の定理と証明を吟味することによって、「自分はこの世にひとりしかいないという必然性と、現実が一つでありそれは神であるという必然性とが同じ必然性だということ」¹¹を理解するのである。

するとこのことを万象の根拠である神からみるならば、現に存在する私というのは、単体の精神としての私ではないことになる。私の身体が他の個物によって刺激される結果生じる観念が私の精神を構成し、この刺激されている身体と刺激する限りでの個物の観念を有している事態についての観念をさらに有しているのが〈私〉である。したがって、〈私〉は、身体物体も含めた個物間のネットワークによって作り上げられており、しかもこうした〈私〉を構成する個物はすべてそのまま神の表現である。そうであるとすれば、身体を刺激して観念を生み出し精神を構成するのは、現に今あるものだけに限らないだろう。すなわち、今は存在しない過去の像や未来の像が身体を刺激して喜びや悲しみと呼び起こす場合もあるだろう。『エチカ』第二部定理 44 備考によれば、そうした過去や未来の像は、想像力が諸観念を連合させることによって生じるのであり、非十全である。しかし、スピノザが採用する存在論によれば、そうした像の観念すらも神の中にあるはずである。そもそもそうした像が精神の中に生じる必然性の理法さえ捉えれば、私の身体を刺激するものが何であったとしても、また、観念の内容がどうであれ、観念の存在することそのものが虚偽とは言えないはずである。

「何であれ精神が理性の導きによって把握するものすべてを、精神は同じ永遠ないしは必然の相の下に把握し、同じ確実性によって刺激される。それゆえ、未来のもの、過去のもの、現在のものの観念であれ、精神はものを同じ必然性によって把握し、同じ確実性によって刺激される。そして、〔こうした三つの観念は〕やはり等しく真である」(E4P62D)。

それゆえ、精神のみならず精神を構成する一切の要素に無限の神の永遠性

¹¹上野前掲書 181 頁

をみるスピノザの眼差しからは、「我々が個物 (res singulares) を理解することが多ければそれだけ、我々は神を理解する」(ESP24) ことになる。さらに、精神は身体の刺激状態の観念であり、こうして発生する像に共通概念を見出すことが第三種認識への道を開くとされていたのであるから、外部に開かれた「有能な身体」を生きたらそれだけ、精神が自身の永遠を知解することに通じる可能性に開かれるという結果になるだろう。そうであれば、スピノザ思想の最終的境地は、精神の問題ではなく、むしろそうした有能な身体の形成であるとも言えそうである¹²。この形成のあり様は別稿で検討すべき課題である。ここでは、スピノザの眼差しが筆者の脳裏に浮かび上がらせた像を述べて本稿を締め括ろう。

「幸福のイメージの中には譲渡不可能なものとして救済のイメージが共振している。歴史がその本旨とする過去のイメージについても事情は同じである。過去は秘密の索引を伴っており、その索引を通して過去は救済を指示される。かつて生きていた人々の周りにあった空気の香気が我々に触れてはこないだろうか。我々が耳傾ける声の中に今では沈黙してしまっている声のこだまがないだろうか。……もしそうだとすれば、かつての世代と我々の世代の間には秘密の約束が存在していることになる。そのとき我々はこの世で期待を担わされているのだ。そのとき我々にはかつての世代と同様に弱いメシア的な力が付与されている」¹³

これは、ベンヤミンの『歴史の概念について』の一節である。すべてが無限な神から直接・間接に必然的に生起されてきたというスピノザの存在論に着目すれば、この過去世代という観念も、この観念を生み出すように私の身体を刺激した過去世代という存在も、それ自体は神において、真であり無限にして永遠である。そのことを自覚すれば、あらゆるものに神との内在的で必然的なつながりを見ようとする『エチカ』は、ベンヤミンが言う〈メシア的な力を有する希望を担わされた過去イメージ〉へと開かれていくように思われるのである。そしてここにこそ、20 世紀前半にヨーロッパ世界のとめどない崩落を目の当たりにしたベンヤミンと、宗教の名のもとに思想信条の自

¹² この身体の形成については、cf. Pascal Sévérac, *Le devenir actif chez Spinoza*, pp. 132-202, Champion, 2005, Paris. また、第三種認識をこの身体の練成と結びつける解釈の試みとしては、竹内良知『スピノザの方法について』、69-109 頁、第三文明社、1979 年も参照。

¹³ Walter Benjamin, *Gesammelte Schriften I*, hrsg. v. Rolf Tiedemann u. Helmut Schweppenhäuser, S. 693f., Suhrkamp, 1972/89, Ffm.

由が暴力によって抑圧された危機の時代を生きたスピノザの、永遠への希求をめぐる遙かな呼び交わしを聴く思いに駆られるのである。

注

スピノザのテキストからの引用はゲプハルト版に依っている。書簡については EP と表記のうえ、ゲプハルト版の巻数をローマ数字で示し、頁数をアラビア数字で示した。『エチカ』の引用箇所を示すにあたっては、E と表記のうえアラビア数字で部を表示し、P によって定理であることを示しアラビア数字より番号を表示した。また、Def によって定義であることを示しアラビア数字で番号を表示した。そして C によって系であることを、S によって備考であることを、L によって補助定理であることを、D によって証明であることを示した。『エチカ』以外のスピノザのテキストについては、ゲプハルト版の巻数をローマ数字で示し、頁数をアラビア数字で示した。なお、引用文中の[]と傍点は筆者による補足である。訳出にあたっては諸訳を参照したが、引用文は筆者による試訳である。

本稿は、科学研究費補助金 基盤研究 (B) (研究課題名「教育空間におけるモノとメディアーその経験的・歴史的・理論的研究」〈研究代表者：今井康雄 課題番号 15H0378〉) による成果である。